

冬季パラリンピック アルペン代表に内定。
トリノより進化した滑りで
金メダルを目指す！



鈴木猛史

Takeshi Suzuki

パラリンピック代表内定

大学へ進学、成長の理由

日本障害者スキー連盟は九月七日、バンクーバー冬季パラリンピックのアルペン代表に内定した十二人を発表した。その中に、本町出身の鈴木猛史選手（駿河台大スキー部猪苗代高卒）がいる。

「猪苗代が一番落ち着く。体調も良くなった気がします」大学の夏休みを利用して、町内の実家に帰省中の鈴木は笑顔を見せる。

パラリンピック代表内定の知らせを受けた心境を「昨シーズンは成績が良かったので、選ばれるとは思っていませんでしたが、正式に言われてほっとしました」と語った。

トリノ大会を振り返って

二〇〇六年のトリノパラリンピックに続き、二大会連続出場。高校二年生で初出場した前回は「若さだけでがむしゃらに走ってしまった。楽しいと思う一方、テンションを上げ過ぎ、体調を崩してしまった」と振り返る。

滑降四位、回転十二位、大回転は途中棄権と、本来の力を出しきれず、メダルには手が届かなかった。

親元を離れ、初めての寮生活。不安もあり、成績が伸び悩みシーズンも過ぎた。しかし、自分と向き合い、考える時間を持つことで、それらを乗り越えた。

「自分の気持ちをコントロールして、考えて競技に臨めるようになった」と自身が言うとおり、二月に韓国で開催された、世界選手権大会の大回転男子座位で優勝。続く三月、W杯最終戦カナダ大会で、スーパー大回転、大回転、回転の三種目で優勝するなど、好成績を残した。

親であり、友人でもあるという父親の保さんは、「親離れというか、いい意味で大人になったんでしょうね。自分で体調管理ができていますよ。ですし、前回より落ち着いて見ていられます。体調と平常心を保ち、いつものような滑りができれば、結果はついてくると思います」と、世界の頂点を目指す息子へエールを送った。

バンクーバー大会の目標

「大きく言えば金メダルでも、とりあえず何色でもメ

ダルを取ることに専念したい。前回取れなかったメダルを猪苗代に持ち帰りたい」と意欲を見せる鈴木。

レースでは、常に冷静に、そして楽しく滑ることを心がけているという。

「トリノとは違う、ちょっと大人になった僕の滑りを見せませす」いたずらっぽい笑顔の中に、アスリートとしての自信をのぞかせた。

アルペンスキー座位とは

日本では通称チェアスキー、国際的には「Sit Ski」と呼ばれる。競技者は、専用のいすに座り、一本のスキー板を取り付け、両手に「アウトリガー」という小さい板のついたストックを持ち、バランスを取りながら滑る。



帰省中、カメラマンで筋力トレーニング。絶妙なアウトリガー操作を支える筋肉は、ひたむきなトレーニングの賜物



Profile すずき・たけし
1988年蟹沢生まれ（駿河台大3年）
小学校2年生の時に交通事故に遭い、両足を失う。翌年チェアスキーと出会う。
猪苗代高校在学中からW杯に参戦し、入賞を重ね、世界種目別ランキング（回転）2位となる。翌06年、トリノパラリンピックに出場、滑降4位、回転12位という成績を収める